

仏事を学ぶ 第十二回



お経の意味⑨

今回は、「仏道を歩み続けることが、そのまま仏さまやその教えを伝えてくださった祖師がたの恩に報いる道である」ということを説いている、修証義第五章「行持報恩」について学びましょう。

【修証義第五章 行持報恩原文】

此発菩提心、多くは南閻浮の人身に発心すべきなり、今是の如くの因縁あり、願生此娑婆国土し来れり、見釈迦牟尼仏を喜ばざらんや。静かに憶うべし、正法世に流布せざらん時は、身命を正法の為に抛捨せんことを願うとも値べからず、正法に逢う今日の吾等を願うべし、見ずや、仏の言わく、無上菩提を演説する師に値わんには、種姓を覩ずること莫れ、容顔を見ること莫れ、非を嫌うこと莫れ、行を考うること莫れ、但般若を尊重するが故に、日三時に禮拜し、恭敬して、更に患惱の心を生ぜしむること莫れと。今の見仏聞法は仏祖面々の行持より来れる慈恩なり、仏祖若し単伝せずば、奈何にしてか今日に至らん、一句の恩尚お報謝すべし、一法の恩尚お報謝すべし、況や正法眼蔵無上大法の大恩これを報謝せざらんや、病雀尚お恩を忘れず三府の環能く報謝あり、窮亀尚お恩を忘れず、余不の印能く報謝あり、畜類尚お恩を報ず、人類争か恩を知らざらん。其報謝は余外の法は中るべからず、唯当に日日の行持、其報謝の正道なるべし、謂ゆるの道理は日日の生命を等閑にせず、私に費やさざらんと行持するなり。光陰は矢よりも迅かなり、身命は露よりも脆し、何れの善巧方便ありてか過ぎにし一日を復び環し得たる、徒らに百歳生けらんは恨むべき日月なり、悲むべき形骸なり、設い百歳の日月は声色の奴婢と馳走すとも、其中一日の行持を行取せば一生の百歳を行取するのみに非ず、百歳の

一言の言葉さえも感謝し、一つの教えさえも喜びで受け取らねばなりません。ましてや正しい教えの根源であり、この上なき大いなる教えを頂ける、限らないご恩こそ感謝し、報いなければなりません。病気の雀さえも恩を忘れず、夢に環を与え三公の地位で恩返ししたではありませんか。窮地に陥った亀は恩を忘れず余不亭の印鑑となって恩返ししました。動物たちでさえ恩を感じるのです。人間たるもの、どうして恩を知らないなどということがあって良いものでしょうか。

月日・時間の経過は矢よりも早く、人の命は露よりもろいものです。どのようなより善き手立てがあつたとしても、過ぎてしまった一日を取り返す事ができません。無益に百歳ほども長生きしたとしてもそれは恨みや後悔の多い月日です。悲しむべき命だったと言つべきです。たとい百歳の月日は色・声・香・味・触・法などの六境の奴隷となって振り回されていたとしても、その中で一日だけでも真実の生き方をしていたなら、一生涯の百歳の月日も意義ある人生となるばかりか、今後百年の次の人生も喜びに救われていくのです。そういう真実の一日の命は、真に尊い命です。尊重すべき肉体なのです。この仏の心を行い持つところの体と心は自分ながらに愛しいものであり、みずからうやまうべきものです。私たちの行いによって仏の命と心と生き方が実現し、仏の大いなる道が自由自在に達成されているのです。ですから、あなたの一日の生き方がそのまま仏さま方の種であり、仏の命を行い持つ事なのです。

いま言つところの多くの仏さま方と言つのは、釈迦牟尼仏陀その人のことです。釈迦牟尼仏陀とは、染汚心が働き出す以前のあるがままの心（不染汚心・如実知見）を仏と言つのです。過去・現在・未来永遠に仏と言われる方々が仏と言われる時は、必ず釈迦牟尼仏陀の不染汚心と言つ生き方になるのです。この染汚心が働き出す以前のあるがままの心（不染汚心・如実知見）を仏と言つのです。染汚心を差し挟

陀生をも度取すべきなり、此一日の身命は尊ぶべき身命なり、尊ぶべき形骸なり、此行持あらん身心自らも愛すべし、自らも敬うべし、我等が行持に依りて諸仏の行持見成し、諸仏の大道通達するなり、然れば即ち一日の行持是れ諸仏の種子なり、諸仏の行持なり。謂ゆる諸仏とは釈迦牟尼仏なり、釈迦牟尼仏是れ即心是仏なり、過去現在未來の諸仏、共に仏と成る時は必ず釈迦牟尼仏と成るなり、是れ即心是仏なり、即心是仏というは誰というぞと審細に参究すべし、正に仏恩を報ずるにてあらん。

【現代語訳】

この悟りを喜ぶ心は、多くの場合、人寿百歳の苦しみ多き大陸に住む人間こそ起こすべきものです。今、このようなご縁で、命の願いによって生まれきたこの悲しみと喜びと忍耐の必要な人間世界こそ、仏の言葉を聞き、姿を見ることができたのです。その仏縁を喜ぶたいものです。

心静かに考えて下さい。正しい教えが広まっていない時は身を投げ出して仏法のために捨てたいと思っても出会うことは出来ないのです。ですから正法に会うことができる今日の私たちこそ願望すべき境遇なのです。ハッキリと見るべきです。釈迦牟尼仏陀は言われました。

『このうえなき悟りを聞き、明らかにしてくる師に会うという事は、氏、素性にこだわってはいけません。顔形を気にしてはいけません。欠点や癖を嫌っては駄目です。行動が変わっているからといって毛嫌いしてはいけません。唯ひたすら智慧を尊ぶ事が大切です。日々朝昼晩に智慧を禮拜し、正しい教えを敬ってさらさら迷いの心を起こしてはならない』と。

今、仏に会い、教えを聞く幸せは、仏や祖師方が人格から人格へと行い保って来て下さったご恩のお陰です。仏や祖師が、もし純粹に伝えなかつたら、どうして今日迄伝わる事ができたでしょう。たった、

む以前が仏というのは誰の事であろうか（それはあなた自身なのです）と、注意深くきめ細やかに学び工夫すべきです。その事がまさに仏恩に報いる在り方だと言つことです。

(注) 即心是仏…心は煩惱にも働き、悟りにも働くわけですから、平常心を仏ということはできないわけです。するとこの即と言つ字は、不染汚心・如実知見と理解すると明確です。染汚心が働き出す以前の純粹な心と解釈すると、『即』と言つのは何者も差し挟む以前の不染汚心のままで現実を認識するという意味になるでしょう。その純粹なところで物事を事実のままに見る事が出来るのを『如実知見』と言います。その心から愚かな自分が照らされ、智慧・慈悲の手立てとしての働きが出てくるのです。

『修証義』は、仏と断絶した凡夫（迷える衆生）が努力して悟りに至ると言つことではなく、仏の「縁起」という真理の智慧と悟りは慈悲となって全ての人々を包み込んでいる（本証）から、その証りを信じ確かめる修行を続けていくところに仏の命が持続する（妙修）と言つ教えです。

『修証義』を編纂した大内青巒居士は、

第一章	総序	仏教の基本的立場
第二章	懺悔滅罪	本証
第三証	受戒入位	〃
第四章	発願利生	妙修
第五章	行持報恩	〃

というように説明しています。

参考…『傍訳曹洞宗読経偈文聖典』（著…中野東禪）